
ポケモン不思議のダンジョン 一繋ぎの時の冒険

ピチューの無幻∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 一繋ぎの時の冒険

【Nコード】

N2963Y

【作者名】

ピチューの無幻∞

【あらすじ】

盗賊だった俺がもう1つの姿、人格と仲間達と共に成長し、強くなり世界を救う物語。

※ベースはポケモン不思議のダンジョン 時・闇の探検隊ですがオリジナルを加える予定なのでストーリー崩壊しかねませんご注意ください

ださい。

それと、時・闇の探検隊をやったのは一、二年前故にセリフ等もう覚えるのでさらにストーリーを外してしまいますご注意ください

第1話 いきなりの急展開!?(前書き)

始まり、始まり

第1話 いきなりの急展開!?

此処は1つの小さな村。此処で俺は生まれ育った。

一見普通の村に見えるが実はこの村の人間全員が盗賊なのである

盗賊とは今で言う泥棒に当たる物で武器を用いて人を襲い食料や金品を奪い取る事だ

しかし、俺は嫌だった。元々平和主義で人を襲う事すら嫌だったのだ。『逃げたい』と何度思った事か。しかし、それは叶わぬ夢なのだ。もし逃げたりすると裏切りと見なされ殺されるのだ

だから仕方なく2本の剣を使い（後のベノムハーブソードとアクアソード）人を襲っていた

そんな生活を送りながら十六回目の誕生日を迎える前日だった

盗賊A「幕府の人間が来たぞー!!」

1人の盗賊が幕府の人間がこの村に向かっているのを見つける。恐らく俺達盗賊の行動を見るに見かねたのか潰しにきたのだろう。因みに時代的には江戸時代後期にあたる

父「お前達は先に逃げろ。俺達がいづらを食い止める!!」

俺達子供は先に村から逃げ大人達は武器を取り戦った。が、結果は見えていた

盗賊B「うわあああ!!」

盗賊C「ぎゃあああ!!」

幕府の人間は強く。5分も立たぬ内に大人は倒された

その頃

無幻∞「はぁ・・・はぁ・・・」

俺は必死に逃げた。だが、大人達を倒した幕府の人間達が迫って来た。

そして遂に追い込まれた。さつき村を襲った人数とほぼ同じ位だ。どうやら俺を除くは全員殺されてしまったらしい。

無幻∞「く・・・来るな!!」

俺は最後の抵抗で剣の柄を使い殺しはしないものの峰打ちをし、気絶させていく

だが、それも限界があり体力が切れてくる

そして・・・

幕府A「覚悟ー!!」

無幻∞「うわあああ!!!?」

目を瞑りもう駄目かと思った。だが、何時まで経っても切られな
いたため恐る恐る目を開けると不思議な光に覆われ何処かに飛ばされ
てしまった

????

俺は気を失っていた。そして数時間後誰かに目を覚まされた

??「あの・・・大丈夫ですか??」

目が覚めると目の前にはオレンジ色のひよこのような体に一本の小さな足を生やした生物が居た。それはアチャモと言うポケモンである

無幻∞「こ・・・此処は何処なんだ？それにあんたは？人間では無いようだが（何だ！？自分の意志で話せない？！それに何か変だ）」

目を覚ましたが何故か違和感がある

アチャモ「貴方は一体誰ですか？それに人間とは？どうみても色違いのピチューですよ？」

無幻∞「あ？ピチューだ？・・・はあ？」

アチャモに言われ自分の体を見ると青い小さいネズミの様な姿だった

無幻∞「何だよこれ！？（それはこっちのセリフだあ！！）」

こっからはアチャモに聞こえていない言わば独り言

因みに「」が裏の人格でドS、ナルシストである○が表で本来の俺の性格である。恐らく何かのショックで裏の人格が芽生えたのだろう

無幻∞（表） 「これは一体どういう事なんだよ」

無幻∞（裏） 「ああ？ 知るかよんな事。恐らくてめえが何かのショックを受けて出来たのが俺だ。だからずっとてめえの体にいさせてもらうぜ」

無幻∞ 「お・・・おい、どういう事だ。おい、おい」

そうして会話と言うより独り言が終わる

アチャモ 「あの・・・どうしました？」

無幻∞「い・・・いや何でもねえ。それより名前だったな。名前は・
・（無幻∞だ!）そ、そうだ。無幻∞つつう名前だ」

アチャモ「私はチャモと言います。よろしくお願いします」

無幻∞「ああ。それよりどうしたんだこんな所で? てめえみたいな
のが?」

チャモ「はい、実は・・・」

次回に続く

二人「おいっ!!」

第1話 いきなりの急展開!?(後書き)

無幻∞ 「しかし、なんだか面倒な事が起きそうだな・・・」

チャモ 「・・・で? いいんでしょうか? こんな中途半端な終わり方して?」

良いの♪良いの♪では、次回もお楽しみに

第2話 奪われた謎の石（前書き）

話の続き

第2話 奪われた謎の石

チャモ「はい、実は私、落ち込んだ時良く此処に来るんです。今日もギルドに入ろうとして・・・」

無幻∞「ギルドってのは何なんだよ一体？」

チャモ「えー！？あのプクリンのギルドをご存知無いんですか？」

無幻∞「知るも何も俺は・・・（おい、今そんな事言ったらややこしいなるよ！！）いや、何でもない、さっき此処に来て昼寝してたからな。この辺は知らねえんだ」

チャモ「あ、そうだったんですか。すいません・・・で、この海岸を抜けて岡の上にあるのがプクリンのギルドです。最近新入りも入ったと聞いたんで私も入ろうと思ったですが・・・勇気が出なくて・・・何時も此処に来てこれを眺めながら海を見るんです」

そう言ってチャモは懐から小さな不思議な模様の書かれた石を取り

出す

無幻∞「その石は何なんだ？」

チャモ「私も良く分かりませんがこれを見てると何だか勇気が出
ります。そして何だか不思議な力も・・・」

無幻∞「ま、俺には関係ねえしな。じゃあな！！また会えたらな！
！」

そう言って海岸を出る『裏』非道なり。だがその時だった

チャモ「きゃあああ！！！」

チャモが悲鳴を上げる。何事かと思い振り向いてみると二匹のポケ
モンに襲われていた

??「へっへっへっ。こいつの持っている石高く売れそうだなドガースー!」

一匹がチャモの持っている石を無理矢理奪った

一匹のポケモンはドガースと言うらしく紫色で腹にドクロのマークがあり、宙に浮いている

ドガース「ケツ、そうだなズバット!おい、お前。俺達『ドクローズ』にこの石を奪われて感謝しろよ!」

もう一匹はズバットと言うらしくコウモリのような姿をしている

チャモ「返してください。それは私の大切な石なんです」

チャモは既に泣きそうだ

ドガース「それがどうした？お前の物は俺達のも物だ！！」

ズバット「それに抵抗して只で済むと思っているのか？」

チャモ「うう・・・」

ドガース「ケツ、物分かりの良いやつだ。さて俺達も行くぞ」

ズバット「ああ！！」

二匹は小さな洞窟に入っていく

チャモ「何で私ってこんなに駄目なんだろう・・・何時も勇気が出ず何も出来ない・・・どうすれば」

無幻∞「おい、おい。てめえ・・・落ち込んだってしょうがないだろ。奪われた物はよ」

チャモ「だって・・・あの石は・・・」

無幻∞「・・・ったく。しょうがねー。俺もあの石取り返してやるからお前も来い!!」

そう言って洞窟に入っていく

チャモ「(私なんかで大丈夫なんでしょうか・・・でも、迷ってる暇は無い!!此処で勇気を出さないでどうするんですか!!)・・・はい、分かりました」

最初はやや怯えながらもやがてその目付きは変わり。決意も付き無幻∞と共に洞窟に入って行った

第2話 奪われた謎の石（後書き）

はたして二人は謎の石を取り戻せるのか！？

第3話 VSドクローズ（前書き）

ズバット、ドガースとの戦いです

第3話 VS ドクローズ

海岸の洞窟

無幻∞達はドガースとズバットを追って洞窟の奥地に向かっていた

無幻∞ 「でんきショック!!」

チャモ 「つつく!!」

途中、数匹のポケモンを蹴散らし、遂に最深部に到着し、ドガースとズバットは行き止まりにより少々焦っていた

無幻∞ 「おい、てめーら。人の物奪うなんて最低だな!! 悪臭ボー
ルに貧弱コウモリ!!」

チャモ 「て・・・敵を挑発しないほうが・・・」

ドガース「悪臭ボール？」

ズバット「貧弱コウモリ？」

2匹「雑魚の癖に粹がるな!!！」

この言葉にぶちギレた2匹はこちらに向かってくる

無幻∞「さて、俺も一暴れしてやるか!!！」

そう言って背中 of 剣を取り、構える

チャモ「私はどうすべきなのでしょうか・・・」

未だにオドオドしているチャモ。そこに

ドガース「喰らえ『たいあたり』!!」

勢い良く突撃してくるドガース

チャモ「うわ!? うう・・・私なんかで勝てるんではないか・・・」

ドガース「よそ見してたら痛い目見るぜ!! 『毒ガス』!!」

チャモ「う・・・ケホッ・・・ケホッ」

チャモは噎せてしまう。それもそのはずだ。今、体の中に毒が入ってしまったのだ。体力が徐々に減っていきフラフラとよろつきはじめる

ドガース「ケッ、大したことないな。さて、後はあの生意気なピチユーだけだな」

そう言ってズバットと交戦中の無幻∞の元に向かおうとするが

チャモ「『ひのこ』!!」

チャモはひのこを放つが普段とは威力が桁違いで、油断したドガースを一撃で戦闘不能にした

そう、これは最初パートナーになる炎ポケモンのとくせい『もうか』。これは残り体力が少なくなると炎タイプの技が1.5倍になるのである

ドガース「ケツ、俺とした事が油断したぜ・・・」

チャモ「はあ・・・はあ・・・勝てた・・・私でも・・・頑張れば・・・ウツ・・・」

毒により体力の限界を迎えてしまったチャモは倒れ込む

一方、無幻∞VSズバットは

無幻∞「『でんこうせっか』!!」

凄いスピードでズバットに迫る

ズバット「そんなの俺に当たるか!!」

だが、空を飛び回避する。だが

無幻∞「逃がすか!!」

何と近くにあった壁をかけ上がり壁を蹴って空中でズバットを切りつける

ズバット「いてて・・・甘くみてたぜ。喰らえ!! 『かぜおこし』
」

無幻∞「チィ・・・ぐわぁ!!」

最初は堪えていたが耐えられなくなり壁に叩きつけられる

ズバット「へっへっへっ!! 止めだ!! 『たいあたり』!!」

ズバットは突っ込んでくる

無幻∞「ククク・・・甘いな!!」

たいあたりが当たる瞬間上空に飛ぶ

無幻∞「あばよ!! でんきショック!!」

そして電撃を放つ

ズバット「ぐわあああ!!」

そしてそのまま地面に落ちたズバット。その後無幻∞も着地する

無幻∞「悪いが返してもらうぜ!!」

そしてチャモの奪われた 謎の石を取り返す

ズバット「へっへっ好きにしろ。だが今度会ったら容赦しないぜ?」

無幻∞「なら叩きのめすだけだ」

そう言い残しチャモを担いで洞窟を後にする

海岸

チャモ「う・う・うん・・・此処は？私の石は？」

無幻∞「たくっ、やっと目覚ましやがったか。もう決着は付いた」

チャモ「そうですか・・・ありがとうございます・・・では・・・」

石を受け取った後そのまま海岸を後にしようとするが

無幻∞「まあ、待て。お前なかなかやるじゃねえか。気に入った！
！やってやるよ探検隊！！」

チャモ「え？本当ですか？宜しく願います」

無幻∞「おいおい、まずギルドに行かなきゃ始まらないだろ」

チャモ「あ、はい。こっちです！！」

そしてギルドに向かう二人だった

海岸の洞窟

さっきズバット達と戦った場所に一匹のポケモンが居た

??「情けないな。俺達『ドクローズ』の名が廃るぜ！！」

ドガース「すいません兄貴。次は必ず！！」

ズバット「だが、あいつら結構やるんだ、だから兄貴も協力してくだせえ!!」

?? 「分かった!! 次は必ず奪うぞ謎の石」

2匹「へいっ!!」

そうして謎の探検隊『ドクローズ』も海岸の洞窟から出る

第3話 VS ドクローズ（後書き）

チャモ 「そう言えば私の毒と傷はどうやって治したんですか？」

無幻∞ 「ああ、あれかオレンの実ってのと持参していた『どくけし』だ」

チャモ 「成る程・・・で、何故都合良く『どくけし』持ってたんですか？」

無幻∞ 「俺が知るかよ。表が勝手に持ってたんだからよ!!」

チャモ 「??表？」

無幻∞ 「と・・・とにかく次話楽しみにしてろよ!!」

第4話 いざ!! ギルドへ!! (前書き)

ギルドにやって来た2匹

あのポケモンも登場します

第4話 いざ!!ギルドへ!!

無幻∞はチャモの案内により丘の上にあるプクリンのギルド前に居た

無幻∞「思ったよりデケエな・・・」

少し感激をしている

チャモ「あの? 本題忘れてません?」

無幻∞「忘れてたぜ!!」

ズッコー!!

チャモ「(こんな人で大丈夫なんでしょうか・・・) えっと・・・
一人前の探検隊になる為に此処で修行するんですが。その柵の上に
乗って怪しいポケモンかどうかをチェックしてもらって中に入るら

しいです」

無幻∞ 「こんなチンケな場所でも意外にセキュリティは万全なんだな」

チャモ 「チンケって・・・と・・・取り敢えず私からですよね・・・」

ゆっくりその柵の上に乗る。すると

??
(A) 「ポケモン発見!! ポケモン発見!!」

??
(B) 「誰の足形? 誰の足形?」

??
(A) 「足形はアチャモ!! 足形はアチャモ!!」

チャモ 「うわ!?! 穴から声が・・・うう・・・やっぱり怖い・・・」

無幻∞ 「それで探検隊が勤まるのかよ？もっと勇気出せてんだ！
」

チャモ 「は・・・はい！！」

勇気を出して柵の上に居続けるチャモ

?? (B) 「よし、怪しい者じゃなさそうだな。で、そのもう一匹もその柵の上に乗れ！！」

無幻∞ 「どうやら俺みたいだな。たくっ面倒臭え」

そう言いながらしぶしぶ柵の上に立つ

?? (A) 「ポケモン発見！！ポケモン発見！！」

??
(B) 「誰の足形？誰の足形？」

??
(A) 「足形は・・・えっと・・・うーんと・・・」

??
(B) 「おい、なにやってるディグダ！！足形を見てなんのポケモンかを見極めるのがお前の仕事だろ！！」

ディグダ 「だってこんな足跡見たこと無いんだもん！！」

ディグダと言うポケモンは言い訳をする

チャモ 「何だか下でもめてますね・・・」

無幻∞ 「早くしてくれよ・・・いい加減眠くなってきたぜ・・・」

柵の上で座り込み呑気に欠伸している

その頃柵の真下では

??
(B) 「おい、どいつなんだ？足跡が分からないってポケモンは？」

ディグダ「あ、ドゴーム。実は・・・今この上で座り込んで足跡が分からないんだ・・・」

ドゴーム「しょうがないな・・・スウー・・・おい、座っているお前！！早く立て！！」

ドゴームと言われるポケモンは息を吸い込むと物凄い音量で叫んだ。
それを近くで聞いたディグダは気絶してしまう

無幻∞ 「！！？何だよこのアホみたいにデケエ声は！？」

余りの五月蠅さに耳を塞ぐ。因みにチャモはビツクリして泡を吹いて倒れている。もう大音量で叫ばれたくないためしぶしぶ立ち上がる

ドゴーム「・・・これはピチューだな。

確かにこの辺には居ないポケモンだが、怪しい者ではないようだな。よし、入れ！！」

そう言った後建物の入口を塞いでいた格子が上がり入れるようになる

チャモ「うーん・・・あ、扉が開いてる！！早く入りましょう！！」

無幻∞「起きて早々騒がしい奴だな。しょうがねえ・・・入るか！！」

そう言って2匹はギルド内に入った

プクリンのギルド

チャモ「何だか不安で（ry」

無幻∞「御託は良いからさっさと梯子降りるぞ!!」

鬼である裏の俺はチャモの足を掴み地下に降りる

プクリンのギルド B1

梯子を降りてみるとそこには沢山のポケモン達が居た。彼ら（彼女ら）は依頼を受けるため此処に来ている優秀な探検隊である

チャモ「何だか沢山ポケモンが居て賑やかですね」

無幻∞ 「耳障りでしょうがないぜ全く・・・」

するとさらに地下に行ける梯子から鳥のようなポケモンがやって来た

??
(C) 「お前達だな。さっさ入口に居たと言う2匹は」

チャモ 「はい、チャモと申します」

無幻∞ 「無幻∞だ!!」

ペラップ 「私はペラップと言う者だ。このギルドの副親方兼情報家だ!!」
「で?要件はなんだ?スポンサーはお断りだよ」

チャモ 「ち・・・違います。私達探検隊になりたくて・・・」

ペラップ「え……（まさかこの時期に探検隊志望のポケモンが居るとは無謀すぎるぞ……）」

チャモ「もしかして無理ですか……」

ペラップ「……はっ。いやいや大歓迎だよ！！じゃあ、まず親方様の所で探検隊登録をするから私に付いてきてくれ」

無幻∞「（何だ……こいつ……急に態度変えやがったぞ）」

そう思いながらペラップにB2にある親方様の部屋の前に案内された

ペラップ「此処がプクリン親方の部屋だ。いいかくれぐれも失礼のないようにな」

無幻∞「ああ、分かった」

チャモ「絶対分かってないと思います」はい、分かりました!!」

大分緊張が消えたのか普通に喋り始める

ペラップ「よし、開けるぞ、親方様!!失礼します!!」

ペラップは部屋の扉を開け中に入る。その後を2匹も入って行った

第4話 いざ!!ギルドへ!! (後書き)

プクリン親方はまた次話登場です。探検隊の名前決めておかなければ・・・

追記 ギルドのメンバーの口調や性格が違う場合ご指摘お願いします

探検隊名、その名は・・・(前書き)

いやはや、2ヶ月振りの更新。すいませんねえ・・・

探検隊名、その名は・・・

前回、親方様と呼ばれるポケモンの部屋にやって来た2匹のポケモンとペラップ。

親方様と呼ばれるポケモンが集めた者なのか、左右に宝物や宝石と言った類いの財宝と、親方様らしきピンク色のポケモンが中央に立っていた

ペラップ「親方様。親方様・・・？」

ドラ？エの如く返事が無い・・・ただの（ry かと思われた次の瞬間・・・

????「やあ、僕プクリン！！プクリンのギルドの親方だよー！！」

2匹「!？」

余りの急な振り向きと、呑気な喋り方に驚いていた。

ブクリン「で、ペラップ。その人達は誰？新しい友達？」

ペラップ「あ、いえ。彼らは新しく此処に入りたいと言ってきた者です」

と、説明してる最中

無幻∞「何か随分らしくねえ親方だな」

ペラップ「ああ、普段はあのようなお方だが・・・怒らせるとんでもない事になるんだ・・・」

無幻∞「へえ・・・なら、尚更怒らせてえな」

チャモ「こらこら・・・何故そう言う発想に行き着くんですかアンタは」

※全て親方には聞こえていません

プクリン「ねえねえ、なに話してるの？僕も混ぜてよ！！ともだち。ともだち！！」

ペラップ「あ、いえいえ何でも有りません」

プクリン「ふうん・・・ま、いや。それより、君達は探検隊名を決めてる？」

無幻∞「は？探検隊名？」

プクリン「うん。探検隊を造るにはまず探検隊名を決めることから始めるんだ♪」

チャモ「うーん・・・決めてませんでした・・・」

無幻∞「じゃあ、適当にチーム『∞大』むげんだいなんてのはどうだ？」

チャモ「ええゝもつと格好い「じゃあ決定ゝ!!」・・・私の意見無視ですか。そうですか・・・」

流石苦勞人ポジのポケモン

プクリン「∞大・・・うん♪良いチーム名だね!!登録♪登録♪みんな登録♪」

スウウーと、突如息を吸い込み・・・そして

プクリン「たああぁー!!」

2匹「!？」

またしても驚いた2匹

プクリン「これで、君達は正式に探検隊だよ♪それと、君達にはこれをあげるよ♪」

プクリンは何処から取り出した探検隊としてのアイテムの数々を紹介する

トレジャーバック これは、ダンジョンで手にいれたアイテム等を閉まうことのできるバックで、探検隊のランクが上がるごとに持つアイテムの数が増える

不思議な地図 見た目は普通の地図だが、不思議のダンジョンと呼ばれる場所を記し、その場所を記録できる地図である

探検隊バッジ これは、探検隊である事を証明できる。探検隊のみ

が持てる貴重なバッジである

プクリン「それと、記念にアクセサリを入れておいたからトレジャーバックを開けてみてよ」

そう言われたので、2匹はバックを開けると中には赤色のバンダナと青色のゴーグルが入っていた

無幻∞「んじゃ、俺バンダナ着けてみる」

チャモ「私の意思決定権は何処へ・・・」

と、しぶしぶゴーグルを付けるチャモ。と裏腹に

無幻∞「・・・頭デカすぎてバンダナ入んねえ・・・」

チャモ「あのお・・・頭じゃなく耳に着ければ・・・」

無幻∞ 「その手があった」

と、右耳にバンダナをはめこむ

プクリン 「うん、二人ともよく似合ってるよ!! それじゃあ、これからは住み込みで働いて修行をしてね」

無幻∞ 「ああ!!」

チャモ 「はい!!」

プクリン 「ペラップ!! 二人を部屋に連れてってあげて」

と、少しの間空気と化していたペラップは二人を部屋に案内していった

探検隊名、その名は・・・(後書き)

次は色々と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2963y/>

ポケモン不思議のダンジョン 一繋ぎの時の冒険

2011年12月31日17時52分発行